

ルカによる福音書1章1-56節 「懐妊の告知」

1A 目撃者たちの記録 1-4

2A パプテスマのヨハネ 5-25

1B ザカリヤの不信仰 5-23

1C 正しい人たち 5-7

2C 恐怖に襲われた祭司 8-17

3C 不信仰の代償 19-23

2B エリサベツの懐妊 24-25

3A イエス 26-56

1B 告知を受け入れたマリア 26-38

2B エリサベツへの挨拶 39-56

1C 訪問を喜ぶエリサベツ 39-45

2C マリアの賛歌 46-56

本文

ルカによる福音書 1 章、1 節から 56 節までを見て行きたいと思います。

私たちは、新約聖書の四つの福音書の三冊目を読み始めます。マタイによる福音書、マルコによる福音書、そしてルカによる福音書です。福音書とは、イエス・キリストが来られた良き知らせを伝えるものですが、一人の人物と生涯を伝えるのに、それぞれ他の人が伝えています。それぞれに書き届けたい人々がいて、それを読んでいく人がどのような人々かで、視点が少し変わります。マタイは、あきらかにユダヤ人に対して書いていることが分かります。旧約時代の預言がいかにも、イエスの生涯に成就していったのかを強調しています。それに対して、私たちがこれまで読んできたマルコ伝は、ローマ人を主に意識して書いたと言われていました。イエス様が教えていることよりも、その「行い」が強調されていました。何を行われたのか？ということは、人々が信じるのに大切な要素になりますね。日本の人たちもそうかもしれません、聖書を知らなくとも、キリスト者たちがどのように生きているのかを、丁寧に観察していると思うからです。

そして、ルカは、「人間としてのイエス」を強く前面に出しています。ルカは、ギリシア人とも言われますし、あるいはユダヤ教の改宗者であったとも言われます。いずれにしろ、ギリシア系の人です。興味深いことに、映画「パウロ」では、パウロを監禁しているローマ軍の上官が、彼のことを「ギリシア人」と言って見下している場面が出て来ます。ギリシア人は、あの裸体の彫像を思い出していただくと、どういうことを大事にしているかがわかるとと思います。人間としての美です。イエス様は、神であられました、もちろん人でもあられました。そこで、この方の人間性が多く描かれています。では、1-4 節を読みましょう。

1A 目撃者たちの記録 1-4

1 2 私たちの間で成し遂げられた事柄については、初めからの目撃者で、みことばに仕える者となった人たちが私たちに伝えたとおりのことを、多くの人々がまとめて書き上げようとすでに試みています。3 私も、すべてのことを初めから綿密に調べていますから、尊敬するテオフィロ様、あなたのために、順序立てて書いて差し上げるのがよいと思います。4 それによって、すでにお受けになった教えが確かであることを、あなたによく分かっていただきたいと思います。

ルカは、使徒パウロの同伴者でありました。使徒の働きにおいて、パウロの第二次宣教旅行の時に、パウロの一行がトロアスからヨーロッパに向けて船出する時のことです。それまでは、パウロの行動は「彼」と書いていて、またシラスやテモテが加えられると、「彼ら」と言っています。けれども、16章10節で、パウロがマケドニア人の「助けてください」という懇願を幻の中で見たので、「私たちはただちにマケドニアに渡ることにした。」とあります。そしてトリアスから船出します。「私たちに変わっているんですね。そして、再びパウロたちが、第三次宣教旅行からエルサレムに行く旅をしている時に、再び「私たち」という言葉が出て来ます(20:5)。それから同行して、エルサレムでパウロを巻き込んだ騒動が起こり、彼はカイサリアで監禁されます。そして、ローマでカイサルの前で裁きを受けるために船に乗りますが、その時も「27:1 私たちが船でイタリアに行くことが決まったとき」とあり、ルカが同行していたことが分かります。ですから、パウロもそうでしたが、ルカもイエス様の公生涯で共に時間を過ごしたことはありません。

加えてルカは、医者です。コロサイ書4章14節に、ローマで監禁されていたパウロに付いていたのが、「愛する医者ルカ、それにデマスが、あなたがたによろしくと言っています。」とあります。医者らしく、体の描写が克明に描かれていることがあります。彼は知識人であり、ギリシア語の文体も美しく、当時の文書形式に倣った書き方をしているそうです。1部と2部に分けて語っている文書が当時の文献にあり、1部と2部に別れています。ルカは、この福音書を「前の書」と呼んでいます。そして使徒の働きを見てください、「1:1 テオフィロ様。私は前の書で、イエスが行い始め、また教え始められたすべてのことについて書き記しました。」とあります。使徒の働きが第二部、後の書になるのです。ルカは初めから、福音書を書き、それから使徒の働きを書く構想を練っていて、それで書き始めていたと考えられます。

そしてこの前置きは、「テオフィロ」という人のために書き記している部分です。テオフィロは、「神に愛されている者」という意味です。彼を「尊敬する」と書いているように、ローマの高官に対する尊称を使っているため、ローマ高官ではないか？と思われれます。すでにイエス様の働きについて伝え聞いていました。直接の目撃者である使徒たちや弟子たちがいて、彼らの中でも何人かはすでに書き始めています。けれども、ルカがそのような人々から話を聞き出して、綿密に調べているので、それを順序立てて書いたほうがよいと言っています。テオピロが、ルカの著作活動を援助したパトロンであったのかもしれませんが。

その彼自身が、信仰を持ったのか、あるいは求道中なのかもしれません。「すでにお受けになった教えが確かであることを、あなたによく分かっていたきたい」とルカは言っています。彼は順序立てて書くことによって、これらが単なるうわさ話ではなく、事実であり、また歴史の中で起こった確かな事なのだという事を伝えようとしているのです。聖地旅行の時に、ある兄弟が、このルカ 1 章 1-4 節から、朝のデボーションの箇所として話しました。なぜなら、これから数多くの、福音書に確証を与える遺跡を見に行くからです。ルカによる福音書の学びが、そのような信仰の建て上げになることを私も願ってやみません。

2A バプテスマのヨハネ 5-25

1 章と 2 章には、他の福音書には出てこない話が出て来ます。それは、バプテスマのヨハネの誕生についての告知です。そして、イエス様の誕生の告知も出て来て、ヨハネがイエス様の先駆者であったのは、実はその誕生の時から、まだ母の胎にいる時からそうであったと言えるでしょう。

1B ザカリヤの不信仰 5-23

1C 正しい人たち 5-7

5 ユダヤの王ヘロデの時代に、アビヤの組の者でザカリヤという名の祭司がいた。彼の妻はアロンの子孫で、名をエリサベツといった。

時は「ユダヤの王ヘロデの時」です。ヘロデ大王のことです。紀元前 37 年から 4 年まで、ユダヤを統治していました。彼自身はユダヤ人ではなくイデマヤ人であり、エドムの末裔です。けれども、ローマ皇帝に重用されてユダヤ人の王として 37 年にエルサレムに来ました。ですから、ルカは注意深く、これが歴史的出来事であることを記しているのです。

そして、ヨハネの父になるザカリヤが、「アビヤの組の者」であるということです。アビヤの組というのは、かつてダビデが礼拝奉仕をすべてのアロン家の子孫が行うように、二十四の組分けを行って、その一つがアビヤの組でありました(1歴代 24:10)。そしてザカリヤにも、神殿での奉仕が回ってきます。そして、妻もアロンの子孫です。「エリサベツ」という名ですが、ヘブル語では「エリシエバ」であり、アロン本人の妻と同じ名前です。

6 二人とも神の前に正しい人で、主のすべての命令と掟を落度なく行っていた。7 しかし、彼らには子がいなかった。エリサベツが不妊だったからである。また、二人ともすでに年をとっていた。

神は、ご計画の中で、人々がどんなに墮落していても、ご自分を信じ、恐れかしこんで生きる人々を残しておられました。例えば、士師の時代、人々がめいめい自分の目に正しいことを行っていたのに、その時代に、ルツ記に記されている、ボアズのような信心深い人を残しておられました。それで、信仰によって応答して、そこから後にダビデが生まれるのです。同じように、当時、ユダヤ人の宗教指導者は、腐敗していました。ルカ 3 章に出て来ますが、「アンナスとカヤパが大祭司で

あったころ」とありまして、彼らが後にイエス様に対して何を行ったかはご存知のはずです。しかし、主は人を救うキリストをこの世に遣わす時に、主を敬う者たちを残しておいてくださったのです。

しっかりと、主の命令と掟を行っていても、彼らには悩みがありました。妻が不妊だったということです。このことも、神を敬う人々の中でよくあった話ですね。アブラハムの妻サラが不妊でした。イサクの妻リベカもなかなか子が与えられませんでした。ヤコブの妻ラケルもずっと子が与えられませんでした。サムエルの母ハンナは不妊のため、言葉にならない呻きをもって祈りを捧げました。特に、彼らは年を取っていたので、まるでアブラハムとサラの生涯を思い起こすような人たちです。

2C 恐怖に襲われた祭司 8-17

8 さてザカリヤは、自分の組が当番で、神の前で祭司の務めをしていたとき、9 祭司職の慣習によってくじを引いたところ、主の神殿に入って香をたくことになった。10 彼が香をたく間、外では大勢の民がみな祈っていた。

当時は、主の御心を求めるのにくじを使いました。それから、人々が大祭司の香壇での奉仕を終えるまで、人々がみな祈っていたとあります。これは大祭司が神殿から出てきたら、彼から祝福を受けようと思っていたからです。

11 すると、主の使いが彼に現れて、香の祭壇の右に立った。12 これを見たザカリヤは取り乱し、恐怖に襲われた。13 御使いは彼に言った。「恐れることはありません、ザカリヤ。あなたの願いが聞き入れられたのです。あなたの妻エリサベツは、あなたに男の子を産みます。その名をヨハネとつけなさい。

この「主の使い」は、ガブリエルです。彼は天使長であり、旧約聖書ではダニエルに対して、メシヤが到来することを前もって告げた時に出てきた天使でした。それが紀元前 539 年辺りのこと、つまり 500 年以上経た後に、そしてマラキ以降、400 年ぐらいい経った後で、ついに主がイスラエルの民に語り始められたのです。

そして「香の祭壇の右」に立っています。なぜか？「あなたの願いが聞かれた」と言っています。香壇の煙は、主の前に立ち上る祈りを表していました(黙 5:8)。ザカリヤは、エリサベツと共に子が与えられることを祈っていたのでしょ。しかし、二人とも老齢になっていて、祈るのも最近はやめていたのかもしれない。けれども、主はその祈りを覚えておられました。私たちは自分の祈ったことさえ忘れてしまうことがありますが、主は祈りをかなえてくださいます。

ザカリヤは主の使いを見て「取り乱し、恐怖に襲われた」とあります。旧約の時代も、天使に会った者たちが死にそうになっている場面が出てきます。ダニエルは、体の力が抜けてしまって倒れてしまいました。けれども、「恐れることはありません」とガブリエルは言います。なぜならば、それは

良き知らせだったからです。妻が子を宿すからです。その子の名は「ヨハネ」、「神は恵み深い」という意味です。

14 その子はあなたにとって、あふれるばかりの喜びとなり、多くの人もその誕生を喜びます。15 その子は主の御前に大いなる者となるからです。彼はぶどう酒や強い酒を決して飲まず、まだ母の胎にいるときから聖霊に満たされ、16 イスラエルの子らの多くを、彼らの神である主に立ち返らせませす。17 彼はエリヤの霊と力で、主に先立って歩みます。父たちの心を子どもたちに向けさせ、不従順な者たちを義人の思いに立ち返らせて、主のために、整えられた民を用意します。」

主の義を求めていたザカリヤにとって、これは大きな喜びとなります。主の前に大いなる者になります、なぜなら多くの人が彼によって、主なる神に立ち返るからです。「ぶどう酒や強い酒を決して飲まず」とありますが、これは生まれながらのナジル人を指しています。民数記に書かれている律法ですが、主に身を捧げるために、一定期間、ぶどうから出てきたものは口にしません。けれども、生まれる時からそれを決めるので、生まれながらのナジル人です。サムソンがそのような人でした。ハンナの子、サムエルもそのようでありましたね。

そして、「まだ母の胎にいるときから聖霊に満たされ」ということは、すごいことです。これからエリサベツが聖霊に満たされる場面がでてきますが、それは胎の子が聖霊に満たされるからです。ルカによる福音書には、ヨハネが聖霊に満たされ、イエス様が聖霊に満たされ、他の人々が聖霊に満たされる場面が多く出て来ます。そうです、使徒の働きにおいて、それが弟子たちに一人一人に五旬節に与えられ、一人一人が聖霊に満たされて、力強い働きをするところを見ます。

そしてヨハネの働きの偉大なことは、「エリヤの霊と力で、主に先立って歩みます。」ということですから。マラキの預言に、主が来られる時にエリヤを遣わし、「4:6 父の心を子に向わせ、子の心を父に向けさせる。」とあります。彼自身はエリヤではありませんが、けれども、エリヤに臨まれた神の御霊の力がヨハネを覆うので、エリヤの働きを彼も行うようになるということです。そして、最も大きな働きは、「主のために、整えられた民を用意します」ということです。主ご自身、つまりイエス様が来られる時に受け入れられるようにしておく、ということです。せっかく、王なる方が来られても、それを迎え入れることができなければ、その到来は台無しです。同じように、私たちの間に聖霊の大きな御業が起こっても、もし私たちの心の整えがなければ、台無しになってしまいます。

3C 不信仰の代償 19-23

18 ザカリヤは御使いに言った。「私はそのようなことを、何によって知ることができるでしょうか。この私は年寄りですし、妻ももう年をとっています。」

ザカリヤは大きな失敗をしました。彼は御使いを見た時に、取り乱し、恐怖に襲われました。彼は恐れに満たされてしまい、それから、そのまま不信仰に陥りました。これは、私たちの姿でもあ

るかもしれません。恐れて、退いてしまうことです。主が何かを行われようとしていて、それはとても良いことであるにもかかわらず、私たちのほうが不安になり、恐れて、それで信じないで退いてしまうのです。ザカリヤは、年老いているからそんなことはありえない。あるのなら、どんな印があるのですか？ということを行っています。

19 御使いは彼に答えた。「この私は神の前に立つガブリエルです。あなたに話をし、この良い知らせを伝えるために遣わされたのです。20 見なさい。これらのことが起こる日まで、あなたは口がきけなくなり、話せなくなります。その時が来れば実現する私のことばを、あなたが信じなかったからです。」

御使いは、自身をガブリエルであると明かしました。メシアが来られることをダニエルに告げた同じ天使長が、そのことが実現しつつあることを告げにやってきたのです。ですから、ここで語っていることは、まさに神の言葉そのもの、神のご計画が実行に移される時です。そこで、ガブリエルは、ザカリヤが求めた印に対して、「口を利けなくする」という印を与えられました。彼がそのような形で、不信仰の言葉を言わないようにする戒めでもありますが、しかし、それは彼に対する配慮でもあったでしょう。彼は、ヨハネが生まれるまで、黙っていなければいけません。その、物を語れない9カ月の間を通して、ザカリヤは、聞くことを学んだことでしょう。自分が何かを語る前に、主が何を語っておられるのか、霊の耳が開かれていったに違いありません。なぜなら、ヨハネが生まれた時に、口が開かれた時に、第一声は主への賛美だったからです。

主は、時に私たちに何かを物理的にできなくさせます。それは、私たちが意固地になって、主が語られているのにそれに受け答えしないからです。ヤコブがエサウに会う時、御使いと彼が格闘して、太ももの関節を外された時もそうでした。彼は、主のなされる良いことを信じられなくて、恐れて格闘したのですが、関節を外されて、それでようやく、主のなされることを悟ることができました。

21 民はザカリヤを待っていたが、神殿で手間取っているのので、不思議に思っていた。22 やがて彼は出て来たが、彼らに話をするのができなかった。それで、彼が神殿で幻を見たことが分かった。ザカリヤは彼らに合図をするだけで、口がきけないままであった。23 やがて務めの期間が終わり、彼は自分の家に帰った。

出てきたら祝福するはずだったのが、その口が閉ざされているのでできませんでした。後に、口が開かれる時に、その奇跡が人々を驚かせて、その神の御業が語り継がれることになります。

2B エリサベツの懐妊 24-25

24 25 しばらくして、妻エリサベツは身ごもった。そして、「主は今このようにして私に目を留め、人々の間から私の恥を取り除いてくださいました」と言い、五か月の間、安静にしていた。

「私の恥を取り除いてくださいました」とありますが、当時は、子を産まないということは恥とされました。そして年老いているのに、だれも生んでいないということであれば、子孫を残していないことになり、不名誉なことになります。しかし、主が憐れんでくださって、目に留めてくださったとエリサベツは慰められています。

3A イエス 26-56

ヨハネについての告知が終わったら、今度は、イエス様ご自身の誕生の告知をガブリエルは行ないます。

1B 告知を受け入れたマリア 26-38

26 さて、その六か月目に、御使いガブリエルが神から遣わされて、ガリラヤのナザレという町の一人の処女のところに来た。27 この処女は、ダビデの家系のヨセフという人のいいなずけで、名をマリアといった。

ザカリヤにガブリエルが告げてから六か月目、ガブリエルはナザレに行きます。「処女」が強調されています。「ナザレ」という町は、今でこそ、キリスト教会の世界で有名で、今はイスラエルの中でアラブ人クリスチャンの町になっています。けれども、当時ほどの文献にも載っていないような、本当に何も無い町でありました。そういった卑しいところに住んでいて、イエス様ご自身が、「ナザレ人イエス」と呼ばれるようになり、何でも無いところから主の若枝を生えさせた、ということ聖書は教えています。

そしてマリアは、まだ、「いいなずけの処女」でした。ユダヤ社会では、結婚に三段階があります。最初に、両親たちが同意して、将来、結婚するように定めます。5-6歳という、非常に小さいときに行われます。次に、婚約を、結婚の一年前にします。これは、結婚と同じような法的効力がありました。ここで婚約を破棄すれば、離婚届を出さなければいけなくなり、他の人と通じたら、姦淫の罪で右打ちにされます。マリアは、この婚約の時にいたのです。彼女は、おそらく13-14歳辺りであったと言われています。

28 御使いは入って来ると、マリアに言った。「おめでとう、恵まれた方。主があなたとともにおられます。」29 しかし、マリアはこのことばにひどく戸惑って、これはいったい何のあいさつかと考え込んだ。

ルカは、敢えて大祭司のザカリヤと、このナザレの町にいる一人の娘を対比させています。先にザカリヤは、取り乱して、恐怖に襲われました。けれども、マリアは声をかけられた時に、ひどく戸惑っていますが、「これはいったい何のあいさつかと考え込んだ」とあるのです。マリアは、考え込む人でした。このギリシア語は、「思いを巡らす、思案する」という意味があり、この御使いが言った言葉に、否定的に拒否反応を示すのではなく、むしろ受け入れて、それは一体何のことなのか、

その意味を考え込んでいたのです。彼女は、御子イエス様が生まれた時に羊飼いが来て、起こったことを話した時、驚いているのですが、「2:19 これらのことをすべて心に納めて、思いを巡らしていた。」とあります。そして、イエス様が12歳になってエルサレムで学者たちと話されていた時に、「わたしが自分の父の家にいるのは当然であることを、ご存じなかったのですか。」と言われて、その時も、「2:51 母はこれらのことをみな、心に留めておいた。」とあります。

ここに、私たちが学ぶことのできるマリアの霊性があります。私たちが感情的に反応してしまうのは、やむを得ないことです。けれども、恐れによって動いたり、退いたりせずに、主が何をなされているのか、思い巡らす、逡巡することが必要です。

30 すると、御使いは彼女に言った。「恐れることはありません、マリア。あなたは神から恵みを受けたのです。31 見なさい。あなたは身ごもって、男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。32 その子は大いなる者となり、いと高き方の子と呼ばれます。また神である主は、彼にその父ダビデの王位をお与えになります。33 彼はとこしえにヤコブの家を治め、その支配に終わりはありません。」

午前礼拝でお話したように、これはまさに、イザヤがかつて、キリストが生まれることについて預言した内容そのものです(9:6-7)。そしてイザヤの預言には、処女から男の子が産まれることも印として書かれています(7:14)。

34 マリアは御使いに言った。「どうしてそのようなことが起こるのでしょうか。私は男の人を知りませんのに。」35 御使いは彼女に答えた。「聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。それゆえ、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれます。」

マリアは、拒否しているのではなく、思い巡らして、どのようにして身ごもるのかを尋ねています。そして、御使いはそのまま答えています。聖霊によって生まれる子であり、だから聖なる方であり、神の御子なのだということです。ここに、彼女が処女であったことが強調されていた意味があります。それは、イエス様がアダムの罪を引き継いでいる子ではなく、神からの方、神の御子なのだということです。

36 見なさい。あなたの親類のエリサベツ、あの人もあの年になって男の子を宿しています。不妊と言われていた人なのに、今はもう六か月です。37 神にとって不可能なことは何もありません。」38 マリアは言った。「ご覧ください。私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおり、この身になりますように。」すると、御使いは彼女から去って行った。

マリアにとって、御使いの言葉の正しさを知るのに、親戚のエリサベツがいます。エリサベツは、アロンの家系ですからレビ族です。マリアは、後で系図が出て来ますが、ダビデ家の末裔です。け

れども、母や祖母のほうで、部族間の結婚があったのでしょうか。レビ族とユダ族が親戚関係になることは、十分にあり得ます。

そして、1章の中で最も優れた言葉は、ここでしょう。「ご覧ください。私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおり、この身になりますように。」主のはしためであるから、主が語られたことは受け入れるだけです。その通りにしてください、ということです。私たちの場合は、主の御言葉が霊的に私たちの内に宿るのですが、マリアの場合は、神のことばそのものである方がその肉体において、文字通り、人として宿られるのです。なので、彼女は私たちの手本です。私たちが主のことばを受け入れ、信じ、従うのです。犠牲が伴います。けれども、主の驚くべきわざの器として用いられるのです。

2B エリサベツへの挨拶 39-56

1C 訪問を喜ぶエリサベツ 39-45

39 それから、マリアは立って、山地にあるユダの町に急いで行った。40 そしてザカリヤの家に行き、エリサベツにあいさつした。

マリアは、ガブリエルの示した印を確かめに行くため、エリサベツのいるユダの町に急いで行きました。ユダ山地にあり、徒歩で四日ほどかかる距離です。言い伝えとして、「エン・カレム」というエルサレム郊外にある町が、そこであると言われています。

41 エリサベツがマリアのあいさつを聞いたとき、子が胎内で躍り、エリサベツは聖霊に満たされた。42 そして大声で叫んだ。「あなたは女の中で最も祝福された方。あなたの胎の実も祝福されています。43 私の主の母が私のところに来られるとは、どうしたことでしょう。44 あなたのあいさつの声が私の耳に入った、ちょうどそのとき、私の胎内で子どもが喜んで躍りました。45 主によって語られたことは必ず実現すると信じた人は、幸いです。」

非常に興味深いやりとりです。ヨハネの母の胎にいる時から聖霊に満たされ、それで母も聖霊に満たされ、大いに喜んでいます。聖霊に満たされるとは、主のご契約や御業をとことんまで喜ぶことです。信仰を持っていない人であれば、または霊的に生ぬるくなっているのであれば、だから何？という無気力、無感覚だと思うのですが、主のなされていることを大いに喜ぶことができるのは、聖霊に満たされているからです。

そして、バプテスマのヨハネとイエス様との関係がすでに、母の胎の中にいる時から始まっています。成人してから、バプテスマのヨハネは主が来られたことをイスラエルの民に告げ、それでイエス様ご自身が来られて、ヨルダン川でイエス様にバプテスマを授けました。今、母の胎にいる時からこの関係が始まっています。思い出すのは、ヤコブとエサウです。兄が弟に仕えるという、将来に起こることを、リベカの胎の中ですでに二人がぶつかり合うことによって示していました。

2C マリアの賛歌 46-56

次から、「マニフィカト」と呼ばれる、非常に有名な、マリアの賛歌が始まります。まず、すべてを読んでみましょう。

46 マリアは言った。「私のたましいは主をあがめ、47 私の霊は私の救い主である神をたたえます。48 この卑しいはしために目を留めてくださったからです。ご覧ください。今から後、どの時代の人々も私を幸いな者と呼ぶでしょう。49 力ある方が、私に大きなことをしてくださったからです。その御名は聖なるもの、50 主のあわれみは、代々にわたって主を恐れる者に及びます。51 主はその御腕で力強いわざを行い、心の思いの高ぶる者を追い散らされました。52 権力のある者を王位から引き降ろし、低い者を高く引き上げられました。53 飢えた者を良いもので満ち足らせ、富む者を何も持たせずに追い返されました。54 主はあわれみを忘れずに、そのしもベイスラエルを助けてくださいました。55 私たちの父祖たちに語られたとおりに、アブラハムとその子孫に対するあわれみをいつまでも忘れずに。」

ここの賛歌の特徴は、マリアがいかに聖書に精通していたか？であります。ここに出て来る一節一節は、旧約聖書に出て来る歌や祈りからの引用になっています。特に、かつて不妊で苦しみ悩んでいたハンナに、主が願いを聞いてくださりサムエルを与えられた時に歌ったものの引用です。「私のたましいは主をあがめ」は、ハンナの歌でサムエル第一 2:1、「この卑しいはしために目を留めてくださった」はハンナの祈りで、1 章 11 節。そして、「どの時代の人々も私を幸いな者と呼ぶでしょう。」は、レアがヤコブによってアシェルが与えられた時に歌ったもの(創世 30:13)。そして、「力ある方が、私に大きなことをしてくださった」は、モーセが主に祈った言葉で、申命記 10 章 29 節から。「主のあわれみは、代々にわたって主を恐れる者に及びます」は、詩篇 103:17。「主はその御腕で力強いわざを行い」は、詩篇 89:10 で、「心の思いの高ぶる者を追い散らされました」は、再びハンナの歌でサムエル第一 2:10、そして「低い者を高く引き上げられ」たというのは、ヨブ記 5:11 です。それから、「飢えた者を良いもので満ち足らせ」るのは、詩篇 107:9、「主はあわれみを忘れず」は詩篇 98:3、「そのしもベイスラエルを助けてくださいました」は、イザヤ 41:10、「私たちの父祖たちに語られたとおりに」は、ミカ 7:20 からです。彼女の賛美は、自分だけの感情を表したのではなく、主ご自身の思いや御心をそのまま言い表したもののなのです。

考えてみてください、彼女は片田舎の町で育った、13,14 歳の女の子です。それなのに、ここまで深い霊性と神の知識がありました。かたや大祭司に任命されていた年老いたザカリヤが、主の良き知らせを信じることができず、こちらの少女がこれだけの霊的理解をしていたのです。

そして、マリアの賛歌のもう一つの特徴は、「大いなることをする主に目を向けている」ことです。46 節の「あがめ」という言葉は、元々は、「大きくする」という意味です。マグフィカトというラテン語も同じ意味ですが、「大きな神を大きなままにする」「大いなることをされる神を、そのまま大いなることをなされる方として受け入れる」ということです。とても大胆な賛美をしていますが、これは、

自分を大きくしているのではなく、逆に、神を大きくしていました。私たちは、自分が大きい人間なのか、小さい人間なのかと、優越感と劣等感の間で揺れ動くのですが、そこで欠けているのは、「主なる神を大きくしていない」ということなのです。

そして賛歌の内容は、卑しい者、貧しい者、身分の低い者に神は敢えて心を留め、大いなることを行われる、ということでもあります。イエス様が説教の中でもこのことを絶えず、話しておられました。貧しい者は幸いだ、富んでいる者は災いであると。これは、その身分そのものが幸い、災いということではなく、貧しい者だからこそ信仰による霊的な富を知ることが容易であるし、自分が低められている時にこそ、神の恵みを知ることができるし、神の霊的な祝福にあずかれるということです。パウロはこのことを、コリントの信者たちに、このように教えました。「I コリ 1:26-28 兄弟たち、自分たちの召しのことを考えてみなさい。人間的に見れば知者は多くはなく、力ある者も多くはなく、身分の高い者も多くはありません。しかし神は、知恵ある者を恥じ入らせるために、この世の愚かな者を選び、強い者を恥じ入らせるために、この世の弱い者を選びました。有るものを無いものとするために、この世の取るに足りない者や見下されている者、すなわち無に等しい者を神は選ばれたのです。」

そしてもう一つ、最後の部分は、主がアブラハムの子孫に良くして下さることを歌っています。彼女もアブラハムの子孫であり、このような身分の低い者であっても、約束の子孫であるから憐れみを受けるのだということです。ルカ伝には、そういつて、背の曲がった女をアブラハムの娘とイエス様は呼ばれ、ザアカイの悔い改めについて、彼が救いを得たのはアブラハムの子だから、と言われました。このように、神の圧倒的な恵みによって、私たちは選ばれ、主に用いられる器となることができるのです。

56 マリアは、三か月ほどエリサベツのもとにとどまって、家に帰った。

マリアがなぜ、すぐに帰らなかったのか？おそらく、確かにエリサベツからヨハネが生まれることを見届けたかったのかもしれないし、あるいは、彼女が妊娠していることがナザレの町に知られたら、石打ちに会うかもしれないという、安全のためだったからかもしれません。大いなる祝福には、それを悟っていない人々から誤解されたり、疑われたり、裁かれたり、苦しめられます。しかし、それでも主のご計画にいることを、聖霊によって大いに喜ぶのです。